

# 意図学習および偶発学習事態における言語陰蔽効果の検討

○北神 慎司

(名古屋大学大学院環境学研究科)

Key words : verbal overshadowing effect, face recognition, intentional/incidental learning

再認前の言語化が、顔の記憶に対して妨害的に働く現象は、言語陰蔽効果 (verbal overshadowing effect; e.g., Schooler & Engstler-Schooler, 1990) として知られている。この研究は、犯人の顔の識別という目撃証言研究の一部として、多くの知見が蓄積されてきている。先行研究では、これまで、さまざまな要因が扱われてきたが、顔刺激の学習が偶発的に行われるか、それとも意図的に行われるかという「学習の意図性」について、直接検討した研究は、北神 (2006, 認知心) を除いて存在しない。

言語陰蔽効果は、パラダイムの性質上、目撃証言研究のひとつとして位置づけられることから考えれば、学習の意図性を扱う意義は充分にあると考えられる。

北神 (2006) は、言語陰蔽効果のパラダイムの中で、学習が、意図的に行われるか、それとも、偶発的に行われるかを操作したところ、意図学習群においては、言語化による顔の記憶の妨害効果 (= 言語陰蔽効果) が示された一方で、偶発学習群においては、逆に、言語化による促進効果が示された。しかしながら、これらの結果は、傾向差であり、結果として、確定的でないため、本研究では、新たに被験者を追加し、北神 (2006) と同様、学習の意図性が、言語陰蔽効果にどのような影響を及ぼすか検討した。

## 【方法】

**被験者とデザイン:** 被験者は、高校生、専門学校生 186 名 (そのうち追加分は、専門学校生 64 名)。デザインは、学習の意図性(意図学習/偶発学習)×言語化(あり/なし)の被験者間 2 要因計画。実験用冊子による小集団実験。

**材料:** 学習用刺激として、10 代後半男性の顔写真 (グレースケール) を用いた。なお、写真は自然な表情の正面顔であり、眼鏡をかけておらず、ひげや傷などの独特な特徴はなかった。また、再認刺激として、学習刺激と同様のターゲット画像の他に、ディストラクター画像として、10 代後半男性の顔写真を 7 枚用意した。なお、これらの画像についても、写真は自然な表情の正面顔であり、眼鏡をかけておらず、ひげや傷などの独特な特徴はなかった。

**手続き:** 全被験者はまず、学習刺激として、ターゲット男性の白黒の顔写真を 1 枚見るよう教示された。顔写真の呈示時間は 5 秒間だった。このとき、意図学習群の被験者には、「これから出てくる顔写真について、後で覚えているかどうかテストを行うので、できるだけ正確に覚えてください。」という教示のもと、顔写真の顔に注目するよう求めた。また、偶発学習群の被験者には、後で記憶テストがあることは告げず、偶発学習手続きをとるために、「これから出てくる写真について、後で写真全体の評定を直感で行ってもらいます。」という教示のもと、顔写真全体に注目してもらい、その後 5 秒間で写真全体についての評定を求めた。

ターゲットの顔写真呈示後、言語化群に割り当てられた被験者には、学習段階で見たターゲットの顔の特徴についての言語記述を求めた。言語記述はひとつの特徴ごとに簡単に書き出すよう求めた。その間、統制群に割り当てられた被験者にはフィラー課題として世界の国名を書き出すよう求めた。それぞれ時間は 5 分間だった。

最後に、全被験者に 8 枚の顔写真の選択肢から、学習段階

で見たターゲット人物だと思ふものを選ぶよう求めた。さらに、その選択に対して、どのくらい自信があるかという確信度を 9 段階 (1 : まったく自信がない ~ 9 : 非常に自信がある) で評定するよう求めた。

## 【結果と考察】

Figure 1 には、各群における修正再認得点の平均を示した。修正再認得点とは、再認判断と確信度得点の両方を組み合わせたものであり、算出方法は次の通りである (Dodson et al., 1997)。被験者の再認判断が不正答 (F.A.) の場合で、かつ、確信度評定で 7,8,9 と評定している場合は 1 点、4,5,6 と評定している場合は 2 点、1,2,3 と評定している場合は 3 点とし、再認判断が正答 (Hit) の場合で、かつ、確信度評定で 1,2,3 と評定している場合は 4 点、4,5,6 と評定している場合は 5 点、7,8,9 と評定している場合は 6 点とした。

修正再認得点について、学習の意図性×言語化の 2 要因分散分析を行ったところ、学習の意図性の主効果 ( $F(1,182)=7.05, p<.01$ ) および学習の意図性×言語化の交互作用 ( $F(1,182)=8.21, p<.01$ ) が有意であり、言語化の主効果 ( $F(1,182)<1$ ) は有意ではなかった。つまり、全体的な結果として、意図学習のほうが、偶発学習よりも、再認成績がよいことが示された。

また、学習の意図性別に単純主効果検定を行った結果、意図学習群における言語化の単純主効果および偶発学習群における言語化の単純主効果 (それぞれ、 $F(1,182)=4.07, p<.05$ ;  $F(1,118)=4.15, p<.05$ ) が有意であった。すなわち、意図学習群においては、言語化による顔の記憶の妨害効果 (= 言語陰蔽効果) が見られ、これとは逆に、偶発学習においては、言語化による促進効果が見られたことになり、北神 (2006) の結果を、データの追加によって、確定的にできたと考えられる。これらの結果は、Itoh(2004)が提唱する BEAS モデルを一部支持しているものと考えられるが、全体的に、再認成績の水準が高いことについては、モデルに適合しないため、今後この点について、検討が必要である。

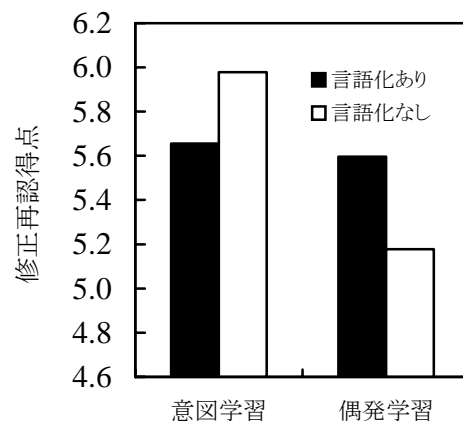


Figure 1 各群における修正再認得点の平均

(KITAGAMI Shinji)